

修士論文(要旨)

2016年7月

中国における老年大学受講生の特徴
—一般高齢者との比較—

指導 杉澤 秀博 教授

老年学研究科

老年学専攻

214J6902

詹 贇

Master' s Thesis(Abstract)

July 2016

A Comparison of the Characteristics of Elderly College Students and Ordinary Elderly
People in China

ZHAN YUN

214J6902

Master' s Program in Gerontology

Graduate School of Gerontology

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Hidehiro Sugisawa

目次

1. 序章	1
2. 方法	1
3. 結果と考察	2

引用・参考文献

1. 序章

高齢者の問題は、今や先進諸国だけではなく、世界の多くの国々にとって重要な社会問題となっている。経済発展と現代医学の進歩により、平均寿命が伸長し、人間はより長い人生を享受できるようになった。しかし、高齢者は加齢によって身体機能などが低下するだけでなく、職業からの引退などにより、家族や地域からの孤立、役割の喪失などの問題に直面しやすい。このような問題は、高齢者の自信や意欲の低下、さらには幸福感の低下につながってしまう。高齢社会においては、単に生存するだけでは充分ではなく、高齢者がいかに幸福に過ごせるかが重要な課題となっている。

社会参加が高齢者の心身健康にどのような影響をもつかについての研究は数多く見られる。たとえば、古谷野（1993）は、社会的活動が高齢者の主観的幸福感に及ぼす影響を明らかにしている。本研究は、社会参加に焦点を当て、特に社会参加の中でも生涯学習に焦点をあてる。生涯学習は高齢者がより高い QOL を達成するために、潜在能力を發揮し社会参加を促進するために必要である。高齢者は生涯学習を通して、新しい社会環境の中で要求される知識・技術を身につけ、自分の生きがいを探し、自己肯定感を向上させることができる。高齢者の生涯学習の効果に関する実証研究では、たとえば、堀（1999）は高齢者の学習援助に関する研究で、老年大学における学びが高齢者における人間関係の再構築に関連があると述べている。国立社会教育研究所（1997）が行った高齢者の学習・社会参加活動の国際比較調査により、高齢者の社会参加活動と学習活動が生きがい感に効果があることが示されている。

生涯学習の機会として代表的なものが老年大学での学習である。老年大学(日本の「老人大学」に相当)の設立が中国における高齢者の生涯教育の始まりだといわれている。日本とくらべて、中国では老年大学以外には高齢者の学習活動の機会が十分に保障されていない。そのため、老年大学での学習は中国の生涯教育、社会参加の機会の中で中心的なものといえる。中国においても、高齢者の社会参加に関する研究は散見されるものの、社会参加である同時に生涯学習の機会でもある老年大学を受講する高齢者についての研究は少ない。そこで本研究では、中国における老年大学の在学者の特徴を、老年大学に在学していない人との比較によって明らかにすることを目的とした。

2. 方法

対象者:対象者は厦門市市内 50 歳以上の老年大学の在学生全数 100 名と老年大学に在学していない者 400 名とであった。

方法:老年大学の在学生については、講義時間の後に調査票を配布し、その後、調査に関する説明を 5 分程度行った。回答済みの調査票は、次回の講義の際に講義室に設置した回収箱に投函してもらう方法で回収した。在学していない人については、対象者に対して調査協力依頼と調査票を 1 部ずつ封入した封筒を郵政で郵送した。1 週間後に訪問し、調査票を回収した。回収数は、在学中の人 100 人（回収率 100%）、在学していない人は 500 人（回収率 39.2%）であった。

分析モデル:本研究では、主として社会参加に関連する要因の研究を参考にし、基本属性、社会階層的要因、身体的健康要因、精神的健康要因、社会的要因、地域環境的要因、老年大学に関する独自要因の 7 つの側面から要因を検討した。

3. 結果と考察

単クロスの分析結果では、老年大学の受講生の特性は平均年齢が低い、女性が多い、就学年数が長く、「ホワイトカラー」の割合が高い、抑うつ症状得点が低い、配偶者からのサポートと友人・知人・近所の人からのサポートが高い、「時間的・物理的な制約」と「内容面の不一致と周囲の人への迷惑」が低いであった。

二項ロジスティック回帰分析の結果、「就学年数」と「友人・知人・近所の人からのサポート」にそれぞれに効果が見られ、老年大学の在学では就学年数が長く、また友人・知人・近所の人からのサポートが多かった。

日本における先行研究では、学習的活動を従属変数として分析した結果、短大・大学など比較的高学歴、地域活動の情報認識の程度、活動情報を教えてくれる人の存在が有意な関連要因として明らかにされている(岡本, 2015)。矢庭ら(2011)も、地域高齢者の社会参加に関連する要因を分析した結果、「学歴」が社会参加に寄与をしていることを明らかにしている。本研究でも、就学年数が高いことが老年大学の在学に影響しているという点では日本における既存研究と同様の結果を得ている。

高等教育を受けていることは、元々の前向きに生きるという価値観が形成されていることや他者に対して社会的役割を担うことにより、更に自己実現を果たしていこうとする意識が強いことが指摘されている(矢庭ら, 2011)。本研究における単クロス分析の結果では、「地域の人々と何かをすることで自分の生活の豊かさを求めたい」といった指向性が老年大学の在校生で有意に高かったことから、就学年数が高い人では、地域社会に貢献したいという意識を介して老人大学に入学した可能性もある。加えて、単クロス分析の結果では、老年大学に対する意識として、「内容面での不一致と周囲の人への迷惑」「物理的・時間的制約」が老年大学の在校生で有意に低かった。就学年数が高い人では、このような老年大学に対する心理的・物理的障がいが低いことも老人大学への入学を促した可能性が高い。

ソーシャルサポートは社会参加の促進に関連する要因の一つであることがいくつかの研究で報告されている。岡本(2015)が社会参加の関連要因の一つとして親しい友人や仲間数が多いことを明らかにしている。安田(2007)は、近隣の人間関係量または信頼できる人間関係量が各種の地域活動への参加を規定する要因として部分的ではあるが、関わっていると指摘している。本研究では、「友人、知人、近所の人などからのサポート」が在校生で有意に高いという、先行研究と共通する結果が得られた。友人・知人・近所の人々は老年大学に対する活動情報を提供する資源として機能しているとともに、友人・知人からのサポートが多い人は友人・知人からの老年大学への入学の誘いを受ける機会も多くなることで、老年大学への入学の促進要因となるのではないと思われる。

引用・参考文献

- 浜口晴彦編集代表 (1996). 『現代エイジング辞典』 早稲田大学出版部, 190.
- 白澤政和・山縣文治 (1981). 「老人の社会参加の実態と今後の方向—大阪市老人生活実態調査に基づいて—」『社会福祉研究』4, 大阪市社会福祉研究会, 22-44.
- 『中国統計年鑑』(1997) 年度版 (2009) 年度版. 中国統計出版社.
- 岡本秀明 (2005). 「高齢者の社会活動とそれに対するフェルト・ニーズ (felt needs) : 実証的研究の提案」. 『生活科学研究誌』. 4, 281-295.
- 小林江里香 (2008). 「高齢者の社会参加の多様性 - 男女差と地域差の視点から -」. 『老年社会科学』, 30 (2), 196-197.
- 橋本修二・青木利恵・玉腰暁子, 他 (1997). 「高齢者における社会活動状況の指標の開発」. 『日本公衛誌』, 44 (10), 760-767.
- 古谷野亘 (1993). 「老後の幸福感の関連要因—構造方程式による全国データの解析」
8(2), 111-25.
- 高山緑・石岡良子・菅原育子・増井幸恵・菅沼真樹・小川まどか (2015). 「後期高齢期・超高齢期の社会参加活動と主観的 well-being」. 『長寿社会の健康と暮らしに関する調査』
- 橋本修二・青木利恵・玉腰暁子・柴崎智美・永井正規・川上憲人・五十里明・尾島俊之・大野良之 (1997). 「高齢者における社会活動状況の指標の開発」. 『日本公衛誌』10, 760-768.
- 塩谷久子 (2000). 「地域社会における高齢者の生涯学習—学習機会への参加と成果」. 『日本生涯教育学会論集 21』
- 文部科学省 (1981). 「生涯教育について」. 『中央教育審議会答申』
- 上條秀元 (2004). 「高齢者の学習・社会参加支援に関する研究：その基礎的考察」『宮崎大学生涯学習研究センター研究紀要』 (9), 1-9.
- 堀薫夫 (2010). 「高齢者大学の機能の変化に関する調査研究—西宮市高齢者大学における10年間の受講者層の変化—」 『老年社会科学』32 (3), 2010.10, 345-346.
- 国立社会教育研修所編 (1997). 『高齢者の学習・社会参加活動の国際比較』
- 謝保群 (2007). 『中日両国における高齢者生涯学習支援体制の現状と課題』 風間書房, 127
- 神部純 (2014). 「地域を学ぶことの意義に関する一考察—大津についての学びに関する調査結果を基にして—」. 『日本生涯教育学会論集』35, 33-42.
- 出相康裕 (2009). 「市民大学受講者の大学への入学志願に対する阻害要因—大阪府内における受講者調査 から—」. 『大阪教育大学紀要』, 第4部門, 教育科学 57(2), 123-135.
- 施書驊 (2010). 「以 CIF 為架構編製之日常生活量表之信度、效度研究」. 國立台灣師範大學 <http://handle.ncl.edu.tw/11296/nd1td/23228071309373001992> (閲覧日: 2016年5月3日).
- 廖新凤・史蕾・王惠珍 (2009). 「机构养老的老年人抑郁与社会支持的相关性分析」. 《护理学报》, 16(14), 67-68.
- 古谷野亘 (1996). 「老年精神医学関連領域で用いられる測度 QOLなどを測定するための測度 (2)」. 『老年精神医学雑誌』, 7(4), 431-441
- 欧爱华・郝元涛・梁兆晖・邓冰・老膺荣・周罗晶・温丽群・周赫・史俏蓉 (2009). 「老年人

- 群心理健康指数量表的应用评价」. 『中国卫生统计』 2009(2), 128-130.
- Yeung, K. C. (1998) The dynamics of interparental conflict and adolescent's behavior problems. Ph. D. Thesis, University of Hong Kong, Hong Kong. (Unpublished Ph. D. Thesis)
- 野口裕二(1991). 「高齢者のソーシャルサポーターその概念と測定」. 『社会老年学』, 2010, 34, 37-48.
- 岡本秀明(2015). 「都市部3地域の高齢者に共通する社会活動への参加に関連する要因— 東京都東部、千葉県市川市、大阪市の調査研究から—」. 『和洋女子大学紀要』, 55, 135-147.
- 矢庭さゆり・矢嶋裕樹(2011). 「地域高齢者の社会参加の実態とその関連要因」. 『新見公立大学紀要』, 32 研究ノート, 117-122.
- 安田節之(2007). 「大都市近郊の団地における高齢者の人間関係量と地域参加」. 『老年社会科学』, 28(4), 450-463.
- 神部純一(2008). 「中国における高齢者の学習と生きがいに関する研究—天津市老年人大学を事例として—」. 『法改正をめぐる生涯学習の新たな基盤整備 (日本生涯教育学会年報第29号)』, 175-190.